

分析利用中心, 教育的利用中心など, を有し, 運営において機動性を持ち, ユーザーにとって気軽に利用できるような施設であるべきであろう。

参加者は次いで立命館大学のSRセンターなどを見学し, その後にぎやかな夕食会を楽しんで, 姫路でまた会うことを約し, 散会した。

◁SRI '97サテライト会議報告▷

HAGA '97 (International Workshop on Medical Applications Using Synchrotron Radiation) の報告

安藤 正海 (KEK, PF)

宇山 親雄 (国立循環器病センター)

表記国際ワークショップが8月8日(金)夜から11日(月)朝まで兵庫県宍粟(しろう)郡波賀町サイクリングセンター「高砂」において開催された。1992年のつくばでのBSR (International Conference on Biophysics and Synchrotron Radiation) 直後に茨城県久慈郡大子町「やみぞ」で開催された放射光医学利用国際ワークショップの精神を受けついただいものである。

開催にあたっていくつかの方針がたてられた。

(1)できるだけ人里離れた静かな温泉地で開催する, (2)医者(臨床医)と物理屋(装置屋)の意志疎通を図り議論を交わす, (3)国内外を問わず臨床医の参加をできるだけ募る, (4)国際の名にふさわしく海外からの参加者を募る, (5)参加者の数を限る, (6)楽しい会合にする, (7)会議録はしっかり作る。

海外からの参加者は20名, 国内参加者は40名であった。講演は26件, ポスターは10件であった。企業展示は1社であった。HAGA '97のみに出席された海外の参加者は1, 2名にとどまらなかったため, 放射光医学利用に対する熱意を感じ, 感激した。その中から新しいテーマなり方向を見いだそうとの姿勢が参加者全員にあったのではないだろうか。その熱気を感じた。臨床医の参

加は日本から8名, ドイツからは1名であった。アメリカからの臨床医の参加はもう少しのところまで逃がした。手弁当のワークショップのため旅費の補助がなかったため, あるいはこれが原因かとも思う。とにかく非常に残念であった。

8日午後4時ごろのSRI '97終了後, ただちにバスで波賀へ移動し, 夜, 波賀町長主催の歓迎会をもってワークショップが開幕した。この後, 温泉湯浴, 国際カラオケが始まり友好を相当温めたようである。

つぎの朝, 日露米仏独からの基調講演をもって科学の部が始まった。技術として臨床レベルに達している利用は“静注法の冠動脈造影”である。この方式が広く社会に受け入れられるかはこれからの推移を見守る必要がある。ドイツではいままでの200件の臨床例とこれから行なう数百例をもって, 専用診療所の建設に進むかどうかの判断がいずれ出されると聞いた。アメリカでは数十例まで到達したところである。日本ではわずか4例であるため, この数を当分増やすことに全力をあげることになる。臨床判断には数百例は必要となるからである。ロシアではシステム全体は完成し, いつでも臨床応用が可能になっている。気管支造影, 乳癌検査など臨床に迫るレベルにあるも

の、吸収コントラストではなく位相コントラストにもとづく医用画像の提案、コンパクトな光源の提案、新しい原理に基づく光源の提案、新しい専用ビームラインの提案等もりだくさんであった。ポスターがあったので時間的には救われたが、進行中、3日間のプログラムを組めばよかったかと一瞬思ったものである。

プロシーディングスは Springer Verlag から来年2月を目標に出版される方向で話しが進んでいる。

9日の夜はノボシビルスク製のウオッカ、10日夜はバーベキューと花火で非常に盛り上がった。昼食もみんなを飽きさせなかった。現地実行委員会の心づくしであった。9日は建設省が設けた道の駅で弁当、10日は直径70-80 cmの透明アクリル製の“Table top 円形加速器”の中をぐるぐる廻る流しソーメンであった。さらに10日午後3時間レクリエーションを入れた。これも非常に好評であった。

会の運営については大会長として神戸大学放射線科の河野通雄教授、組織委員長として兵庫県立先端科学技術センター (CAST) の千川純一所長を仰ぎ、宇山・安藤が実行委員会・プログラム委員会をお世話した。「現地に強力な事務局があるとないとでは大違い」であるので神戸大学放射線科の山崎克人先生に事務局長を御願ひした。山崎先生が快諾くださったこと、河野先生が大会長としてみずから寄付金集めをしてくださることになったので、ワークショップはなかば成功したも同然の雰囲気になった。事実、非常に細かく神経の行き届いたワークショップになったのではないだろうか。参加下さったみなさんからの反応は上々であった。その分、放射線科の医局員は大変であった。感謝の念でいっぱいである。もちろん他の実行委員も現地に負けない活躍をした。この

HAGA '97は SRI '97と同様、兵庫県からみれば、西播磨科学公園都市開き行事の一部である、11日 CAST で開催された産業利用国際会議の専門部会として位置づけされた。HAGA '97と CAST での国際会議の組織委員と講演者が一部重なることによって一体感が演出された。そのおかげで県から資金援助を受けることができた。このワークショップを可能にした兵庫県にも感謝したい。上に掲げた“人里離れた静かな温泉地”を探すにあたっては兵庫県知事公室の岡田泰介審議員に大変お世話になった。記して謝意を表したい。放射光学会にも後援していただいた。この企画が放射光学会の行事にならないだろうかとの考えもあったが、時間がなかったのであきらめた。

ドイツでも2年前に“臨床医と装置屋の交換の場”を企画したそうである。波賀では多くの臨床医の参加をもとに臨床医と装置屋の間の侃侃諤諤(けんけんがくがく)の議論を期待した。医学界における放射光利用はまだ層が薄いので、このような期待は時期尚早であるのかもしれない。放射光の医学応用の知識と経験を深める場として、放射光学会とか放射光医学研究会に対する期待は大きい。

さて、ハードウェアはどんどん立ち上がってくる。日本では SPring-8 が立ち上がってくれば臨床応用あるいはその前段階に関しては2箇所体制になる。さらに他機関、他省庁でも医学専用光源の計画があると聞く。それぞれが何を目玉にするのかをはっきりさせて“競争と協調”の道を歩むことになろう。医学界の中に放射光利用に対して関心のある先生方は多いと聞く。放射光の医学応用の将来の発展のために医学系の先生と物理屋のさらなる密接な共同研究体制を築いていくことが大切であると痛感した。